

・自選五十一首・



米満英男

よねみつ・ひでお 1928年、大阪生まれ。「短歌世代」に参加のあと「鴉a」「海馬」を経て、現在、同人誌「黒曜座」を編集発行。歌集に『遊神帖』『遊歌之巻』など、評論集に『円虹への驕旅』がある。近々、『歌枕怪異小説集』出版の予定。現代歌人協会、日本文藝家協会会員。

蒙古斑もつ乳児らが東洋の漆黒の夜を満ち満ちて眠る

未明のままの谷間ばかりの邦に棲み皆しかたなく危座を覚えぬ

禽は撃たれて真直ぐに墜つ すでに地上にあれば我らは倒るるのみ

収穫を終へし地の罅遂げしものはなべて醜く乾きて止まず

額より先掌と蹠のつやめける原人らのため 山河かがやけ

〈開眼〉ののち何も見ず 盲目の僧のみが知る天地の腐色

夕ふかく墨磨ればふとかのときの男臭きに似てかぐはしき

少年の一途なる目を焦がしたる金環蝕 のちの永久の焚口

血は内であれば匂はず卓上の聖書を覆ふ仔羊の皮

父といふ呼び名呼ばれて見返れば常の夕雲も鬼胎めきたり

ひとに額あり額に日当るかなしみをこころに反芻しつつ峠越ゆ

合同歌集「日本殺風景」

「父の荒地・母の沿岸―日本歴史」

「花体論」

日本より外に出たことがない。従ってパスポートも持っていない。そんな話をすると、知人たち皆、哀れそうな目を向けてくれる。なぜそうなったのか、自分でもわからない。ときにテレビなどで、異国の素晴らしい風光に接すると、心が動く。だが足のほうも気持ちのほうも、一向に動き出そうとはしない。

そのほらいせのせいとか、日本にいる限り外国語恐怖性症候群にならないので、日本国内北は利尻・礼文島から、南は石垣・与論島に至るまで、随分あちこち訪ねまわった。歴史のな件になると、パスガイドよりこちらのほうが「よく知っているぞ」と声を発したくなる。ところが、なんと、風光明媚な景観や、海山の奇観、風土色豊かな行事、心地のよい温

葡萄一粒咽喉へ落とししつかのまを愛ならず匂ふ温き色欲

払曉へ角先立てて行く牡牛われら晩年へ何もて発たむ

わが髪を飯のなかより拾ひ上ぐひとすぢのこの昏き滅入りよ
没り際の陽に狂ひ舞ふ風見えてほのかにわれは帰路を惑へり

あしうらを日に干し眠りある女あるひは此処もまひるの奈落
鬼瓦の鬼が噴てる地の上のさくら快樂の煮凝りに似て

零したるひとつぶの塩光りるまなき彼岸のごとく遙けし
五月闇といへど樹の秀の確と見ゆ風騒がしくそこに集へば

わが影のうちに子の影容れて憩ふ父なればこのこころ茄子紺
猿ヶ島にて一匹の猿空仰ぎひいと発しし声を聴きたり

壺くろく笑へるごとし火をくぐり来しものなれど無明にあらず
夜更けひそかに金管楽器に残りある息漏れてをり秋欠けてをり

詩に憑かるるは志に懨るるに通ひつつ播椅子止まるまでの樂欲
まなうらの朱よ一身を血と化して陽と対ひをるこの飢渴はや

いづこよりか称名の声湧くごとし岩山の稜に月差すのみに
己が一生を封じ込むごとし黙然と木箱に釘を打ちぬし父よ

さくらさくら咲きてただ散るこの花にいくたりのひとあやめられしや
妻と寝ね子と寝ねときには猫と寝ぬもつとも抱かれ上手は猫なり

死ぬ順を待ちる列に割り込みて来る奴があり少し間があく
声も優しく猫の名を呼ぶ妻のその抑揚は何処の壺押せば出づ

「遊神帖」

「遊歌之巻」

泉などの情景と出会いながら、そこで手帖をひろげて、短歌を書き上げたことはない。

いままでに駄作・凡作などを交せて、数千首の歌を詠み上げた。《風景詠》らしい歌もつくったように思うが、はつきりと実際の地名や所在地のわかる歌は、一首もつくっていないように思う。《写生詠》から外れ、それらの景と対峙したあとに感じる勝手気儘なイメージを、自己流に再現し直して、三十一文字に組み立てているとしか言いようがない。

なんの添え書きも解説も付けていないので、どこでの、どんな場面であったのか忘れることもある。が、忘れ切ったところで、はじめその作品が単なる対象（素材）を詠じたものでなく、当方の肉眼を通し、さらに《心眼》——とまでは言い難いものの、対象対自分の呼吸の合った映像が純粹に仕上げられたのではなからうかと、頷くことがある。

いやはや、何ともたよりない《作歌姿勢》である。われながら、よくもまあ変挺な姿勢と思想と文体とで、変挺な短歌をつくりつけてきたものだと感心、否寒心する。

風景詠のみでない。日常詠、心象詠、社会詠なども、すべて気随気儘に狭いわが脳髓の中で懸命に捏ね上げるしかない。今更、どうやり直そうとしても無理である。歌に従う故に、歌よ、お前も機嫌よく我に従え——。

角を構へゆるりと牛の踏み出す行方したたるばかり無に盈つ

いかで男は子を産み得ぬと蔑するや幾億の精子を捨てて来にしを

石に彫られ石ごと壊えゆく道祖神明け方にのみ銀朱に笑まふ

凡人の凡の字いささか風に似て虫よりちひさきへへ抱へをり

素より只の男しかれどたまさかに音声猛猛しく妻子を叱る

文芸に操られ来し一生とは思はねど彼奴美形過ぎたり

参じたき師匠のひとり根尾に棲む樹齡千余年とふ薄墨桜

一期一会たとへば咽喉を滑りゆく冬の葍の赤きつぶらも

項傾し泣き伏す母を見し記憶少年の瞳にただ赫かりき

さくらの下より立ち去る際にうかうかとわが影を連れ出すを忘れぬ
女より生まれ来りし男なるを肉叢のいづこかに潜む女が嗤ふ

「遊歌之卷」以後

年齢とは傾くものといふなれど何処まで傾けば倒れるのかなあ

柩の中に必ず屍体のある故にひとら平然と焼き終りを待つ

父ありき母ありきそのへきの内に今なほ確とちちははのあり

ケイタイを逆さに読めばイタイケなりいや五月蠅い小狐娘

カフカのザムザさむざむと読む逢魔が刻さむざむざと雨降りしきる

わが脳のおほかた味き識域のなか緋の歌のまれに閃く

夢枕に小町式部ら封じ込め烏羽玉の夜を色濃く眠る

遊びごころはすなはち荒びごころなり風雅風騷いよいよ驕れ